

鍾山のある情景

―王安石詩考―

湯 浅 陽 子

【要旨】

北宋期に新法を擁して政治経済の改革を推進した政治家として著名な王安石は、当時を代表する詩人の一人と目された人物でもあった。ここではその詩中に繰り返し登場する「鍾山」という題材を取り出し、その描かれかたを追いつながら、彼の詩の持つ性格について考察する。官遊中の詩に描かれた、遠方から望み見られた鍾山、引退後に江寧府から仰ぎ見られた鍾山、また山中に身を置いて描かれた鍾山のそれぞれの姿は、その時々々の彼の心情を反映したものであると同時に、当時の士大夫に広がっていた賈田徙居の風潮や、彼自身の為政者としての自負といった社会的な背景を反映したものである。また、より彼の内面的な傾向に関わると思われる繊細な美しさに対する志向は、北宋中期の詩における晚唐詩の受容を考える資料となるべきものであり、その繊細な美的感覚と、社会的存在としての自己に対する意識や自負の強さという、相異なる要素が、一人の人物、さらには一篇の詩のなかに並存している状況を指摘することができる。そのような状況は、一面で王安石をはじめとする文人官僚たちの精神の幅広さを示すものであると同時に、彼らのそれぞれが内に抱く不安定さを窺わせるものでもあり得るのではないか。

はじめに

王安石（一〇二一―一〇八六 字介甫）は、北宋神宗期に二度にわたって、宰相に当たると同中書門下平章事に任じられ、財政の再建と人民生活

の向上とを目指して、青苗法・保甲法・市易法等の一連の大胆な「新法」を断行した改革派の政治家として後世にまで知られている。また当時の他の文人官僚たちの多くがそうであったように、彼は官僚・政治家であると同時に詩文の作者でもあり、また学者でもあった。彼の詩文作品は別集『臨川集』一百巻に収められており、学者としての業績には『子説』『周禮新義』等がある。彼が各分野において残した業績に対する同時代また後世の評価は様々であるが、このように様々な分野に才能を発揮し得たという点においては、彼もまた北宋期の文人官僚たちのなかにおいて、典型的な人物のひとりと言いうことができるだろう。

ここで特に彼の詩人としての側面に着目すると、彼の詩作品は『臨川集』（四部叢刊本）巻一から巻三十八において見ることができるが、彼の詩に対しては、既に宋代において一定の評価が与えられていたらしく、その様子を詩話等の記述から窺うことができる。例えば南宋・嚴羽は『滄浪詩話』（清・何文煥輯『歷代詩話』 中華書局 一九八一年 所収本）「詩體」の項で個人の名を冠した詩のスタイルを列挙し、宋人の名を冠するものとして、「東坡體」「山谷體」「后山體」「王荊公體」「邵康節體」「陳簡齋體」「楊誠齋體」の七種を挙げているが、このような記述からは、南宋期、少なくとも嚴羽の周囲においては、王安石の詩風が蘇軾や黃庭堅・陳師道・邵雍のものとならんで、北宋期を代表する詩風の

ひとつとして捉えられていたことが理解されるだろう。

しかし、彼とほぼ同時代を生きた蘇軾（一〇三六—一一〇一）の詩文が現代に至るまで広く読まれ、また様々な角度から研究が進められているのに較べると、王安石の詩を論じた研究は数・量ともに随分少ないように思われる。総体としての宋代の詩風の形成、また変化の様相についての研究を進めていくためには、これまでに考察の対象とされることの比較的少なかった、王安石をはじめとする多くの詩人たちの作品に対しても、今後さらに詳細な検討を進めていく必要があるのではないだろうか。

では王安石の詩について、どのような切り口から考察を進めていくことができるだろうか。例えば詩話や後代の人々の詩文に表現された評価を参考として、その詩風の特徴を考察していくのもひとつの方法だろう。しかしそのような方法には、ただ単にそれらの批評の内容を具体的な作品に照らして確認するに止まってしまうという危険性も存在する。加えて、後人による批評にはそれぞれの批評者の生きた時代の価値観が反映されていることが多いだろうし、また、それらの批評はあくまでも他人の目から見た評価や解釈であって、詩の制作者の意識や意図を精確に反映したものとは言いきることのできないものである。無論、考察を進めるための補助的な資料としてそれらを参考にすることは有意義であろうが、より制作者の意図を精確にとらえるためには、後人による評価というレンズを通すのではなく、じかに個々の詩の表現そのものに向き合い、丁寧に検討を重ねていくことによって、作者が詩という文学形式に、どのような内容をどのような表現方法を用いて盛ろうとしているのか、そして読者に何を伝えようとしているのか、を考えていく他はないのではないだろうか。

では王安石は詩という文学形式にどのような内容を盛ろうとし、それによって詩の読者に何を伝えようとしているのだろうか。またその際、同時代の歐陽脩や蘇軾らのものではない、彼の詩の持つ独自性はどのようなところに存在するのだろうか。このような問いに対する答えを求めするための手がかりを得るためには、彼が特によく用いる言葉やモチーフに着目してみるのも一つの方法ではないだろうか。そこでここでは、彼の詩に繰り返し登場する「鍾山」という題材を取り出し、この題材の描かれかたを追いながら、彼の詩の性格について考察してみたい。

一 鍾山のイメージ

鍾山は、北宋江寧府（現江蘇省南京市）の東北に聳える山である。撫州臨川（現江西省臨川縣）の出身である王安石は、個人的にこの鍾山と特別の繋がりを持っているのだが、その繋がりには、彼の父の王益（九九三—一〇三九）が仁宗景祐四年（一〇三七）に江寧府通判に任ぜられたことに始まるようである。王益は江寧府通判在任中に没したが、その際、郷里の臨川ではなく江寧府南郊の牛首山に葬られた。その後、嘉祐八年（一〇六三）に没した安石の母の呉氏も、また熙寧九年（一〇七六）に没した安石の子の雱も当地に葬られており、父益の死後、王安石一家の墓所が臨川から江寧牛首山に移った状況を知ることができる。

このような墓所の移動に伴い、生前の彼らが帰るべき土地もまた臨川から江寧府に移っていると考えられる。これは北宋期の士大夫層に多い、いわゆる「徙居」―本籍地の移動―が王安石の家族に起こったことを示しているが、王安石の徙居の状況を知ることのできる事項を彼の伝記に沿って拾い上げると、仁宗慶曆二年（一〇四二）に進士及第した後、

王安石は地方、あるいは首都汴京で職務に当たっているが、嘉祐八年（一〇六三）に母の服喪のために江寧府に帰還した後は、神宗熙寧元年（一〇六八）に汴京に赴き、ついで參知政事として新法の推進に当たるまで、ずっと当地に留まっている。またその後も同七年（一〇七四）に知江寧府として当地に帰還し、翌八年に再び同中書門下平章事として汴京に在任する一時期を挟んで、九年には判江寧府事となり、十年には致任して、集禧觀使という肩書きで江寧府に居住するに及び、その後は哲宗元祐元年（一〇八六）に没するまで十年ほども当地で隠退生活を送っている。そして没後はいまでもなく江寧府に葬られた。

このように生涯を通じて江寧府という土地と強く結びついていた王安石の詩文に、この土地に言及する表現がしばしば現れるのは、自然なことと言えるだろう。また彼の詩には、「江寧府」という大きな都市の名よりも、もっと小さな個々の地名や寺院の名がしばしば登場するが、それらは王安石がこの土地に親しみ、この土地のことをよく知っている様子を窺わせるだろう。そしてそのような種々の地名のなかでもよく目に付くのが、他ならぬ「鍾山」なのである。王安石はこの「鍾山」の姿を、長い時期を通してさまざまな視点から描いており、その描かれ方には、その時々彼の状況や心境が大きく関わっていると思われる。

*
ところで、王安石の詩における鍾山の描かれかたについて考察を進めるためには、彼以前の時代において、鍾山がどのような山として人々に認識され、それがどのように文学作品のなかで表現されてきたかを、あらかじめ確認しておく必要があるだろう。そこでまず、六朝期から唐代に至るまでの鍾山が、どのような山として人々に認識されていたかを概観しておきたい。

まず、『初學記』卷八「州郡部・江南道」に引かれる劉宋・山謙之『丹陽記』には、

蔣子文爲秣陵尉、自言己將死、當爲神。後爲賊所殺、故吏忽見子文乘白馬、如平生。孫權發使封子文而爲都中侯、立廟鍾山、因改爲蔣山。

蔣子文 秣陵尉と爲り、自ら言へらく己は將に死なんとす、當に神と爲るべしと。後に賊の殺す所と爲るに、故吏 忽ち子文の白馬に乗れるを見、平生の如し。孫權 使ひを發して子文を封じて都中侯と爲し、廟を鍾山に立て、因て改めて蔣山と爲す。

という記述があり、この山はもと「鍾山」という名であったが、三国呉の孫權がここに後漢の蔣子文を祀る廟を建てたことにより、「蔣山」と改名されたと述べている。また同じ故事について、『藝文類聚』卷七「山部上」鍾山の項に引かれる劉宋・徐爰『釋門略』は、「建康北十餘里有鍾山、舊名金山。漢末金陵尉蔣子文、討賊戰亡、靈發於山、因立蔣侯祠、故世號曰蔣山。（建康の北十餘里、鍾山あり、舊と金山と名づく。漢末金陵尉蔣子文、賊を討ちて戰亡するに、靈は山に發す、因て蔣侯祠を立つ、故に世に號して蔣山と曰ふ。）」とも記しているので、古くは「金山」とも呼ばれていたらしい。また南齊・孔稚珪「北山移文」（『文選』卷四十三）に見られるように、他に北山と呼ばれることもある。

また『藝文類聚』の同じ項に引かれる東晉・庾闡「揚都賦」注には、建康宮北十里、有蔣山、『輿地圖』謂之鍾山。元皇帝未渡江之年、望氣者云、蔣山上有紫雲、時時晨見。

建康宮北十里、蔣山あり、『輿地圖』は之を鍾山と謂ふ。元皇帝未だ江を渡らざるの年、氣を望む者云へらく、蔣山上に紫雲有り、時時 晨あはに見ると。

と、晉王朝の南渡と東晉元帝の建康（現南京市）での即位の予兆がこの山に現れたことを記しているが、このような記事からはこの山が建康を象徴する役割を持っていたことが推測される。

さらに、建康に都が置かれていた南朝期の鍾山には、いくつもの仏寺が建立されていたらしく、その様子は梁武帝蕭衍「遊鍾山大愛敬寺詩」〔先秦漢魏晉南北朝詩〕梁詩卷一）、陳・徐伯陽「遊鍾山開善寺詩」〔同〕陳詩卷二）、釋洪偃「遊鍾山之開善定林息心宴坐引筆賦詩」〔同卷十〕等の詩題からも窺うことができる。また同時にそこは皇帝をはじめとする貴族・文人たちが遊山を楽しむ場でもあり、その様子は梁・沈約『宋書』卷七十八蕭思話傳の、

嘗従太祖登鍾山北嶺、中道有磐石清泉、上使於石上彈琴、因賜以銀鍾酒、謂曰、「相賞有松石間意。」

嘗て太祖に従ひて鍾山北嶺に登るに、中道に磐石清泉有り、上は石上に彈琴せしめ、因りて賜ふに銀鍾の酒を以てし、謂ひて曰く、「相ひ賞するに松石の間の意有り」と。

等の記述にも見る事ができる。

またこの沈約は、「鍾山」そのものを詩のテーマに取りあげた「鍾山詩應西陽王教」詩（『文選』卷二十二 胡氏刻本）を制作している。唐・李善はこの詩の全体が五つに区分されると注しているが、それぞれの部分の表現内容を検討すると、作者が個々の部分で鍾山の持つ様々な側面をひとつずつ取りあげ、それを組み合わせることによって、この作品全体で鍾山を多角的に表現しようとしていることが理解される。やや長篇の作品なのでここでは一部のみを抄出するに止めるが、沈約はまず第一部分（八句）でめでたき靈山として鍾山を言祝いだ後、続く第二部分では山の形態を次のように描いている。

發地多奇嶺 地より發して奇嶺多く
 千雲非一狀 雲を干して一狀に非ず
 合沓共隱天 合沓 共に天を隠し
 參差互相望 參差 互ひに相ひ望む
 鬱律構丹嶠 鬱律 丹嶠を構へ
 峻嶒起青嶂 峻嶒 青嶂を起つ
 勢隨九疑高 勢は九疑に隨ひて高く
 氣與三山壯 氣は三山と與に壯んなり
 ここに描かれた鍾山は、天に向かって幾つもの切り立った嶺を聳え立たせた峨々たる山塊であり、同時に神山のような勢いや生気をも帯びている。このような切り立った山の姿は、現実の形態の写實的な描写と言ふよりも、第一部分に示された理想化された靈山のイメージを濃厚に継承したものと考えることができるだろう。

また次の第三の部分では、山からの眺望と四季折々の山中の景物のすばらしさを描いている。

即事既多美 事に即きて既に美しき多きも
 臨眺殊復奇 眺めに臨みて殊に復た奇なり
 南瞻儲胥觀 南のかた儲胥觀を瞻
 西望昆明池 西のかた昆明池を望む
 山中咸可悅 山中 咸な悦ぶべく
 賞逐四時移 賞は四時を逐ひて移る
 春光發壘首 春光 壘首より發し
 秋風生桂枝 秋風 桂枝に生ず
 この山中には美しいものが多いが、ことに眺望がすばらしく、南は儲胥觀、西は昆明池まで望むことができる。山中の景物はみな楽しむべき

ものであり、見るべきものは四季の移り変わりを追って変わっていく。春には山の頂に光が射し、やがて秋風が桂の枝に吹き初める。西京（現陝西省西安市）にある儲胥觀や昆明池まで見ると述べるのは、李善も「此皆假言之。（此皆な之を假言す。）」と注しているように、現実的なものとは言えず、遠くまで見渡せることを表現するためのレトリックであるが、この第三部分全体の表現からは、首都近郊の鍾山がすばらしい眺望と四季折々の美景を楽しむことのできる場所として、当時の貴族たちに親しまれていた様子を窺うことができよう。

多値息心侶 多く値ふ 息心の侶
 結架山之足 結架す 山の足
 八解鳴澗流 八解 澗流に鳴り
 四禪隱巖曲 四禪 巖曲に隠る
 窈冥終不見 窈冥として終に見えざるも
 蕭條無可欲 蕭條として欲すべき無し
 所願從之遊 願ふ所 之に従ひて遊び
 寸心於此足 寸心 此に於いて足らしめんことを

ここへ遊山に訪れた者は、僧侶が山の麓で座禅を組んでいるのにしばしば出会う。八つの解脱は谷川の水音のなかに表され、険しい岩の陰に隠れるようにして四段階の禅定が実践されている。遊山者は、深遠な悟りには終に達することはできなくとも、さびさびとした気分になり何の欲も無くなってしまう、彼らと交遊してここで心を充たしたいという思いに駆られるのである。既に述べたように、当時すでに鍾山には幾つもの仏寺が存在したらしく、ここではそれらの寺院に関わって仏教の修行

の場所としての側面を示したものであろう。

また最後の第五の部分（八句）では不老長寿を求めた君主がこの地へ行幸する様子が描かれており、この作品の全体に盛られた内容からは、沈約をはじめとする当時の人々が鍾山に対して、風光明媚な行楽の場であり、かつ仏・道の寺観がある場所でもあるというイメージを抱いていたことが理解される。

沈約の描いた鍾山に対するこのようなイメージは、唐代にも継承されていくようであるが、鍾山に寄せられた詩の数は決して多くはない。都が長安に遷った唐代においては、江南の一都市近郊の鍾山が詩の題材とされる機会は、おそらく随分少なくなったのではないだろうか。

唐詩から、鍾山に寄せられた例を挙げると、代宗大曆期（七六六〜七七九）に活動した詩人である李嘉祐（天寶七年（七四八）進士）に「蔣山開善寺」（全唐詩卷二百六。題下に「一作崔峒詩」と注す。）があり、またほぼ同時代の耿湋（寶應元年（七六二）進士）に「遊鍾山紫芝觀」（同卷二百六十八）があるので、大曆期に至っても鍾山には仏寺や道観が存在し、そこが士人たちの遊山の場所となっていたと思われる。また特に鍾山の仏寺に寄せた詩としては、南唐先主の中書侍郎同平章事であった李建勳（賜号、鍾山公）に「鍾山寺避暑勉二三子」（同卷七三九）があり、そこに「松影晚留僧共坐、水聲閑與客同尋。（松影晚く僧を留めて共に坐し、水聲閑かにして客と共に尋ぬ。）」という句を見ることができ、このような表現からは、前掲の沈約の詩で「八解鳴澗流」と表現されていた谷川が、五代南唐期に至っても変わらずに水音を起っていたことが想像される。

このように唐末・五代に至るまで鍾山は依然として士人たちの遊山の地であり続けたようだが、それはもはや峨々たる仙山のように理想化し

て表現されたりはしていない。晩唐昭宗天復初年（九〇一）に七十余歳で進士及第を果たしたという曹松「鍾陵野歩」（同巻七二六）には、

野火風吹闊 野火 風 吹きて闊く

春冰鶴啄穿 春冰 鶴 啄みて穿つ

渚橋齊驛樹 渚橋は驛樹に齊しく

山鳥入公田 山鳥は公田に入る

と、早春の田園で目にする景物が淡々と描かれており、江南の日常的な田園のなかに鍾山が捉えられるようになったことを窺わせている。

このように六朝期から唐末・五代までの時期を通じて、詩の作者である士大夫たちにとっての鍾山は、風光明媚な行楽の場であり、かつ仏寺・道観のある山でもあり続けたと思われるが、時代の変遷と、より日常的なものに題材を求める方向に向かっていく文学の変化に伴って、個々の詩のなかでは、理想の仙山のイメージを投影されたものから、次第に日常的な田園風景のなかの山へと変化していったと考えられる。

二 鍾山と月

では、北宋中期の人である王安石は、この鍾山をどのように描いているのだろうか。既に述べたように、王安石の一家は父益の代に撫州臨川から江寧府へ徙居したのだが、この徙居に関わる表現を、「雜詠四首」其一（臨川集巻二十六）に見ることができ。

故畦抛汝水 故畦 汝水に抛ち

新壟寄鍾山 新壟 鍾山に寄す

爲問揚州月 爲に問ふ 揚州の月

何時照我還 何れの時にか我の還るを照らさん

古い農地を汝水の畔に抛りだして、新しい墓を鍾山のそばに設けた。そこで訊ねる、揚州の月よ、いつになったら私の帰還を照らすことになるのか、というのが詩の大意であろうが、この詩の起・承句は、李壁注（巻四十）が「撫州城下、臨水・汝水合流此。公言去撫而自居江寧也。（撫州城下、臨水・汝水 此に合流す。公は撫を去りて江寧に居するを言ふなり。）」と指摘しているように、王安石の家族の臨川縣から江寧府への徙居に言及したものと考えられる。承句の「新壟」はこれも李壁が「楚公葬於江寧之牛首山。（楚公は江寧の牛首山に葬らる。）」と注しているように、江寧府に新たに設けた父の墓を指すであろう。さらにこの二句では「汝水」が臨川を代表する景物として描かれているのとともに、「鍾山」が江寧府を代表する景物として示されていることに注意しておきたい。既に見たように、鍾山は東晉の南渡の際からこの地を象徴する山であったが、王安石にとっても、自分の帰るべき土地である江寧府を象徴するものとして感じられているのである。

ところが次の転句で作者は「揚州月」に語りかけている。そこでこの作品が制作された時、作者は揚州にいたと考えられるのだが、王安石は仁宗慶曆二年（一〇四二）に第四名で進士及第し、この年から同五年までの間、簽書淮南判官として揚州（現江蘇省江都縣付近）に在任しているので、この詩はこの時期に制作されたのではないかと考えることができる。また劉乃昌氏・高洪奎氏『王安石詩文編年選釈』（山東教育出版社 一九九二年）は、この詩の制作時期を王安石の揚州赴任当初の慶曆元年（一〇四一）であろうと考証されているが、王安石の進士及第および揚州赴任は慶曆二年であり、一年の誤差があるのではないだろうか。なお両氏は「雜詠四首」の其一・二について、初めて外任となった時の江寧の旧居に寄せる思いを表現したものとしているが、より

精確には、この詩は公務のため楊州に滞在中であった作者が、父祖の地である臨川から江寧府への自らの家族の徙居に関わる思いを表現したものと考えることができる。

これを受けた結句で作者は、今、眼前にしているこの月が、いつか引退して鍾山の麓へ帰る自分を照らす日が来るであろうことに思いを馳せているのだが、李壁注は、この詩の「月」と「故畦」とを組み合わせた表現の踏まえるところとして、杜甫「泛溪」詩（杜詩詳註巻九）の「衣上見新月、霜中登故畦。濁醪自初熟、東城多鼓擊。（衣上に新月を見、霜中に故畦に登る。濁醪自ら初めて熟し、東城多く鼓撃す。）」を指摘している。確かにこの「泛溪」詩の表現には、「月」と「故畦」の両方が現れているが、この王安石の詩句の、現在、地上を照らしている月が、未来のある時において自分を照らしている様子を想像するという発想は、やはり次に示す同じ杜甫の「月夜」詩（杜詩詳註巻四）の表現により多くを学んだものではないだろうか。

今夜鄜州月 今夜 鄜州の月

閨中只獨看 閨中 只だ獨り看ん

遙憐小兒女 遙かに憐れむ 小兒女の

未解憶長安 未だ長安を憶ふを解せざるを

香霧雲鬢濕 香霧 雲鬢濕り

清輝玉臂寒 清輝 玉臂寒し

何時倚虛幌 何れの時にか虚幌に倚り

雙照淚痕乾 雙りながら涙痕の乾くを照らさん

この詩は杜甫の作品のなかでもとりわけ広く知られているもののひとつであろう。杜甫は、戦乱のなかで遠く離れ、今この時に同じ月の光に照らされているであろう妻子の様子を思い描き、それと同時に、将来の

いつか一緒に月の光に照らされたいという願いを表現しており、この詩を読む者は空間と時間とを超えて杜甫とその家族を照らす月の光に、妻子、特に妻に向けた彼のひたむきな思いの投影を見るのである。

王安石が杜詩を好んだことについては、他に「杜甫畫像」詩（臨川集巻九）の「吾觀少陵詩、爲與元氣侔。力能排轉幹九地、壯顏毅色不可求。（吾 少陵の詩を觀るに、元氣と侔と爲る。力は能く排転して九地を幹するも、壯顏 毅色 求むべからず。）」等の表現にもその反映を見ることができ、ここで「月夜」詩に学んだ表現が用いられているのも、王安石が杜詩をよく読んでいたことを窺わせるものであろう。しかし杜甫「月夜」と王安石「雜詠四首」其一の兩詩は、ともに時間的・空間的に離れたところへ向けられた愛情を表現し、現在の孤独な状態にあって未来の幸福を夢見しているという点ではよく似ているが、杜詩が直接に家族に言及しているのに対して、王詩は家族に直接言及することはなく、専ら場所への思いを表出しているという点では異なっている。つまり、心の向かう先が人であるのと場所であるのとの違いなのだが、このような相違点は、杜詩の表現が作者の家族に対するひたむきな思いを感じさせるように、王安石の場合については、新しい徙居の地がすでに彼にとつて特別な心の繋がりを感じさせる、大切な場所となっていることを窺わせるものではないだろうか。

*

さらに王安石は、月に向かって「何時照我還」と問いかける表現をこののちにも用いている^①。この詩は「泊船瓜洲」（臨川集巻二十九）という題から、現在の江蘇省揚州市の長江畔の瓜洲鎮で制作されたものであると考えられるが、清水茂氏『王安石』（中國詩人選集第二集 岩波書店 一九六二年）、また前掲の『王安石詩文編年選釈』所収のこの詩の

注では、いずれも熙寧八年（一〇七五）二月、前年に一旦辞した宰相に再び任せられて、開封へ向かう途上での作と考証されている。長江畔の瓜洲鎮は揚州を経て開封へと向かう運河の起点であり、おそらくこの時王安石は、江寧府から長江の南岸沿いに船を進めて京口（現江蘇省鎮江市）まで下り、そこで北岸の瓜洲鎮へ渡るといった行程をとったのではないだろうか。

京口瓜洲一水間 京口 瓜洲 一水の間

鍾山祇隔數重山 鍾山 祇だ隔つ 數重の山

春風自緑江南岸 春風 自づから江南の岸を緑にす

明月何時照我還 明月 何れの時にか我が還るを照らさん

京口と現在作者がいる瓜洲鎮とは長江を隔てているだけでごく近く、この瓜洲鎮から彼の引退後の住まいのある江寧府北郊の鍾山は、幾重かの山を隔てているだけでまだまだ近い。しかしこれから運河をたどって開封へ向かえば、江南と鍾山は自分からほとんど遠ざかってしまう。これを受けて転句で描かれる春風に吹かれた長江南岸の緑は、江南のおだやかで豊かな風土と、そこでの自分の生活に対する愛惜の思いを象徴しているだろう。そして結句に置かれるのが「明月何時照我還」であり、作者はここでも、今、眼前にしているこの月が、未来のある時に、職から退いてまた鍾山の麓へ帰る自分を照らすことに思いを馳せている。この「明月何時照我還」は、語の用い方とともに現在の眼前にしている月から未来の鍾山へ帰る自分を照らす月を想像するという文脈も、既に見た「雜詠四首」其一ときわめてよく似たものと言いうことができるだろう。

王安石が詩中で同じ表現を繰り返し用いることについては、前掲注釈（七十八頁）のなかで清水氏も「春風自緑江南岸」の句について、これが「送和甫至龍安微雨因寄吳氏女子」詩（臨川集卷三十）「荒煙涼雨助

人悲、淚染衣巾不自知。除却春風沙際綠、一如看汝過江時。（荒煙涼雨は人の悲しみを助け、涙は衣巾を染むるも自ら知らず。春風沙際の緑を除却すれば、一に汝の江を過ぎし時を見るが如し。）」の転結句の表現に類似することを指摘し、「得意のことばをもう一度いったのかもしれない」と評しておられるが、この詩のみならず王安石には同じ詩句を何度も繰り返し用いる傾向があるようだ。その繰り返しは一時期に集中して見られるのではなく、かなりの長期間に渡って回想とともに用いられており、とりわけ鍾山への帰還と関わる詩に多くみることができる。ここで取り挙げている「雜詠四首」と「泊船瓜洲」で繰り返されていた鍾山をめぐる「明月何時照我還」も、実は、さらに後の「與寶覺宿龍華院三絶句」（臨川集卷二十八）において踏襲されているのである。

王安石がこの「與寶覺宿龍華院三絶句」を贈った釋寶覺の伝記の詳細は不明だが、潤州（現鎮江市）の金山寺の僧であるので、年代から、蘇軾がその肖像画に「金山長老寶覺師眞贊」（東坡集卷四十）を寄せた僧と同一人物ではないかと思われる。この三詩は、詩中の表現によれば「泊船瓜洲」詩の十年後の元豐八年（一〇八五）頃の作と考えられ、當時王安石は鍾山で引退後の生活を楽しんでいた。まず一首目を見てみよう。

老於陳迹倦追攀 陳迹に老い 追攀に倦む

但見幽人數往還 但だ幽人の數しば往還するを見るのみ

憶我小詩成悵望 憶へらく 我が小詩 悵望を成す

鍾山只隔數重山 鍾山 只だ數重の山を隔つのみと

ここでは、古都である江寧府で隠退生活を送っている現在の時点から「泊船瓜洲」詩の制作を振り返り、「むかし私のちいさな詩は、『鍾山祇隔數重山』と、悲しげに遠くを眺めていたのだった。」と、かつて自分

がこの句に込めた心情を思い出している。

続いて二首目では、この詩を制作した十年前の情景を回想する。

世間投老斷攀縁 世間 老いを投じ 攀縁を斷つ

忽憶東遊已十年 忽ち憶ふ 東遊 已に十年なるを

但有當時京口月 但だ 當時 京口の月有りて

與公隨我故依然 公と與に我に隨ひて 故より依然たり

思い出されているのは京口の空に浮かんでいた月である。既に見たように「雜詠四首」其一・「泊船瓜洲」詩で継承されていた「明月何時照我還」は、現在の月から未来の鍾山へ帰る自分を照らす月を想像するものであったのだが、ここではそれを受けて、現在の月から過去に自分を照らしていた月を思い出すという、従来とは逆の、時間を遡る視点をを用いていることに注意すべきであろう。結句ではこれを受けて、十年という時間の経過を超えて、あなたと月とだけは相変わらず私について来てくれると表現し、寶覺と月とを重ねることで、彼が自分に寄せてくれる変わらぬ交情に感謝する表現としてまとめている。またこの詩の表現からは、先の「泊船瓜洲」詩を制作した時、その場に寶覺がいたことをも知ることができる。

さらにこれを受けた最後の三首目で、また作者は月に問いかけている。

與公京口水雲間 公と與にす 京口水雲の間

問月何時照我還 月に問ふ 何れの時にか我の還るを照らすかと

邂逅我還還問月 邂逅 我れまた還りて月に問はん

何時照我宿金山 何れの時にか 我の金山に宿るを照らすかと

ここでは直接に「泊船瓜洲」詩の「何時照我還」に言及し、それを踏まえてまた現在から未来を望もうとする表現を作っている。こんど月が照らすのは、将来のいつか、寶覺の住する金山寺を訪問する自分である。

先にも述べたようにこの詩の制作を元豐八年（一〇八五）とすると、王安石は翌年に没しており、彼が金山寺の寶覺のもとを訪問することができたかどうかは不明である。

このように王安石の詩、特に鍾山への帰還に言及する詩には、しばしば同じ発想、また殆ど同じ詩句が長期間に渡って繰り返し使用されることがあるのだが、一人の詩人が長期間に渡って、ある一つの句や言い回しを何度も繰り返し使用するという現象は、多くの詩人に普遍的に見られるものではないだろう。むしろそれは、王安石の詩作に見ることのできるひとつの「くせ」と言うべきものかもしれない。反復される鍾山と月のイメージには、彼の帰るべき土地である江寧府に寄せる思いの強さが反映されているが、それは同時に、彼が自己の行く末を思いやりまた来し方を振り返ることによって、人生全体を俯瞰することを試みながら、自らの人生を構成する重要な要素としての新しい故郷と自分との関係を、繰り返し確認していることを示しているのではないだろうか。

本章で見てきたように、王安石が鍾山と江寧府への愛着を若年期から継続して抱き続け、またそれを表現し続けていることは、彼と鍾山とが個人的な理由によって特別に結びついていることを強く印象付けるものであるが、一方でそれらの表現は、前章で見たような鍾山に纏わる歴史的な意味・文脈からはかなり離れたものであったと考えることができよう。つまり、ここでは歴史的な意味よりも個人的な意味をより優先させた表現が成立していると指摘できるのではないだろうか。

三 江寧にて

王安石はこのように鍾山とそれによって象徴される江寧府への愛着を、

若年期から継続して抱き続けているが、一方、父祖の地である臨川への思いを詩文に表現することは少ない。このような「新しい故郷」への愛着は北宋期の士大夫層に見られる買田徙居という新しい状況を反映して生まれたものであるが、王安石とほぼ同時代を生きた、眉州（現四川省）の出身で常州（現江蘇省）に買田した蘇軾の場合は、生涯にわたって帰れない故郷への思いを詩文に表現し続け、それに比して、新しく買田した土地への思いが綴られることは少なく、王安石とはちょうど逆の状況を見ることができた。このように一口に買田徙居と言っても、士大夫たちが本籍地と徙居先の土地とに寄せる心情は、各々の状況によって異なっていたと思われる。

では王安石が江寧にかくも強い愛着を示すのはなぜだろうか。その理由はいくつか考えることができる。まず一つめの理由は、江寧府がすでに彼の家族の墓所となっていることである。例えば蘇軾の場合は常州に家族の墓所があるわけではなく、彼自身、没後は汝州（現河南省）に葬られている。王安石のように家族がすでにその地に葬られていれば、徙居先は、彼が在世中に帰るべき場所であるという性格を強く持つであろうし、また没後の彼がその地に葬られる可能性も随分高くなるであろう。このような状況は、王安石においては若年期から存在したものであり、第一章で既に見た「雜詠四首」其一等の表現にも投影していると思われる。

また二つめの理由は、彼がこの土地に対して、知府あるいは為政者としての自己の功績の反映を感じているということである。これは彼が知江寧府を経験した壮年期以降の作品に関わるものであろう。ひとつの例として、「離蔣山」（臨川集卷二十六）を挙げてみよう。

出谷頻回首 谷を出でて頻りに首を回らし

逢人更斷腸 人に逢へば更に斷腸す
 桐鄉豈愛我 桐鄉 豈に我を愛さんや
 我自愛桐鄉 我 自ら桐郷を愛す

この詩について李壁注では制作年代の考証をしていないが、王安石が知府を離任して江寧をはなれたのは熙寧元年（一〇六八）・同八年（一〇七五）の二回であり、そのいずれかの際に制作されたものと考えられる。転・結句で繰り返されている「桐郷」は、現在の安徽省桐城縣北の地名であるが、ここでは、前漢の大司農朱邑がこの地の嗇夫（訴訟・租税担当の役人）となって領民に敬愛され、死後はここに葬ってくれるよう遺言したという、『漢書』卷八十九循吏傳所収の逸話を踏まえて、王安石がそれまで知府として在任した江寧府を指していると考えられる。この朱邑の逸話は、江寧府に地方官として在任し、没後もこの地に葬られることが予想される王安石の状況とは容易に重ねられるものであるが、ここでことさらにこの地が自分にとっての「桐郷」だと表現していることには、知江寧府としての自己の功績に対する彼の自信や自負を見ることができるとはならないだろうか。

さらに三つめの理由は彼がこの地の田園の豊かさを愛でていることである。これは江寧府に居住している時期の作品、特に致仕した後の晩年期の作品から窺われるものである。熙寧十年（一〇七七）に判江寧府事を辞し、府城と鍾山とのちょうど中間辺りにある住居に引退して「半山」と号した後の王安石の詩作品には、豊かな田園のなかで感じる満ち足りた気分を描くことをテーマとするものが数多く現れる。鍾山の周囲に広がる田園の姿を淡々と描く表現は、既に第一章で述べたように晩唐期の詩にも見ることができたが、王安石が彼の詩に描き出す江寧府の田園は、大抵、緑なす山や水路を満たす豊かな水、さらにはそれらの恵みを受け

た作物などから構成されている。

ではそのような田園描写のなから幾つかの例を挙げてみよう。まず「北山」(臨川集卷二十八)には次のように表現されている。

北山 輪緑漲横陂 北山 緑を輪りて横陂に漲らしめ

直壑回塘灩灩時 直壑 回塘 灩灩たる時

細數落花因坐久 細さに落花を數ふるは坐することの久しきによ

り

緩尋芳草得歸遲 緩かに芳草を尋ねて歸ること遅きを得

この詩の起・承句は、緑豊かな鍾山が豊かな水を送り、それが水路の形ごとに様々な姿となって満ちあふれる情景を捉え、さらに転・結句はその水路のほとりで作者がゆったりと心のままに野遊びを楽しむ様子を描き出している。ここでは鍾山からもたらされた水は、土地を潤し、さらにそこに遊ぶ作者を守るものとして描かれている。

またこれに類似した表現を、「書湖陰先生壁」一首(臨川集卷二九・元豐六年)にも見ることができ。

茆簷長掃靜無苔 茆簷 長に掃ひて靜かにして苔無く

花木成畦手自栽 花木 畦を成すは手自ら栽う

一水護田將綠遶 一水 田を護り 緑を將て遶らしめ

兩山排闥送青來 兩山 闥を排し 青を送りて來たらしむ

この詩の転句では、当地に隱棲する湖陰先生(楊德逢)の質素ではあるが自足した生活を取り巻くものとして、水田を守るように流れる緑色の水が描かれているが、そのさらに遠景に青い山が望まれる様子が、門を押し開いてその青さを送りつけて来る、と擬人的に表現されている。

「北山」詩と同様に、水はこの詩においても土地を守るものとしての信賴感をもって描かれており、おそらくその水源に当たるといふ山は、

向こうから人間に対してその豊かな緑を送ってくる、つまり人間に接近しようとしているかのように感じられている。つまりここでは水も山も、人間を守る親しむべき対象としてとらえられているのである。

また「木末」詩(臨川集卷二十七・元豐六年)でも、

木末北山煙冉冉 木末の北山は煙冉冉たり

草根南澗水泠泠 草根の南澗は水泠泠たり

綠成白雪桑重綠 白雪を綠成して桑は緑を重ね

割盡黃雲稻正青 黃雲を割盡して 稻は正に青し

と、木立の向こうに聳える鍾山(北山)を遠景に描き、近景には草の根元を浸している南の谷川の冷たい水を描いているが、転結句では桑・麦・稻という農作物が豊かに茂っている様子を描写しており、作者はここでもまた、豊かな鍾山から流れ出した水が田園に豊饒をもたらす様子を描こうとしている。前章で、月と鍾山を関わらせる表現に因って、王安石の詩には、同じ表現やモチーフが長期間に渡って繰り返し使用されるという特色があるのではないかと指摘したが、ここでは類似のモチーフがある程度短い期間に繰り返し用いられるという状況を指摘できるだろう。

前章で既に見たように、官遊中に描かれる鍾山は、遠くから望み見られ、また夢見られるものとして、自らが帰るべき場所の象徴であったが、本章で幾つかの例を挙げて考察したように、引退後の詩に描かれる鍾山は、自らから流れ出した水のもたらした田園の豊かさに囲まれ、緑に覆われて聳える、いわば豊饒の源泉としての役割を担っていると考えられる。それはもはや古い時代の詩に描かれていたような理想の仙山でもなく、また単なる遊山の場所でもない。引退後の王安石にとっての鍾山は、江寧府という現実の土地の豊饒の象徴にほかならないものである。

このように王安石の晩年の詩には、豊饒な田園のなかでの穏やかな自

足した気分を反映したものを多く見ることができるとは、ここでは水や植物が作者および人間と敵対することはなく、人間に好意的な、人間の生活を守るものとして描かれている。それは見方を変えれば、それらを人間にもはや脅威を与えることのない、いわば既に飼いや慣らされた自然物として認識していることを示すものとも言えよう。とりわけ、運輸交通の大動脈であり、かつ田園に豊饒をもたらすものである水路が、親しい対象として信頼感をもってしばしば描写されているのが目に付くが、このような表現は同じ北宋中期の歐陽脩や蘇軾の作品には見られないものであり、この江寧府の風土、さらには王安石という人物の個人的な感覚と関わったものではないかと思われる。

また、田園を描写した詩句では、貧困・苦勞、また、生きる者の無常の悲哀を描くことは少なく、ひたすら退隱後の閑居の楽園としての美しく豊かな農村風景を描き、その中に在る幸福な自己の姿を繰り返し描いていることにも注意すべきだろう。既に見た如く穏やかな春景を描くことがほとんどであることも、このような志向に関わるものではないだろうか。さらに言うならば、晩年の王安石が繰り返し描く田園の豊饒は、彼自身が青苗法等の農業政策を実行した結果であればこそ現出したものと感じられており、そうであるからこそ、なおさらそこに満足が見いだされているのではないだろうか。つまり豊かな田園の情景は、彼の為政者としての自負や、自分の業績に対する自信を強く反映したものであると考えることができよう。

四 鍾山にて

本稿ではこれまで王安石の幾つかの詩に表現された、官遊中に遠方か

ら望み見られた鍾山、また引退後に江寧府から仰ぎ見られた鍾山のそれぞれの姿を手がかりとしつつ、王安石の詩の持つ性格について考察してきたが、個々の詩の描く鍾山の姿は、それぞれの詩の制作された当時の王安石の置かれていた立場と、密接に結びついたものであったと言えることができよう。つまり彼の詩は、あくまでも社会的存在としての自己から離れないところで制作されているのである。詩人が同時に官僚・政治家でもある、あるいはそれらを目指す者でもあるという状況は、中国の古典詩においては普遍的なものと言うことができようが、科挙出身者が高官となり、同時に代表的な詩文作者となった中唐以降、特にこの宋代においては、詩人たちが抱いていた官僚としての自負、または知識人としての自負はとりわけ強くなっていたと考えられる。その際に、官僚としての自己と詩人としての自己の間でどのようなバランスを取るかは、個々の人物に委ねられており、その結果、個人の資質や志向によって、詩のなかに公人としての顔がしばしば登場する場合から、もっぱら個人的な生活や感興を描こうとする場合まで様々な様相が現れたと思われる。そのような状況に照らすと、王安石の場合は、詩のなかに公人としての自負がしばしば現れる傾向にあると言えることができるだろう。

しかし、王安石はその詩のなかで、ただ単に公人としての自意識にこだわった表現のみをしているわけではない。既に見たように長年に渡って繰り返しされる鍾山と月のイメージは、新しい故郷へ寄せる思いの純粋さを感じさせるものであったし、また鍾山を望む田園で描かれた自足した気分は、春の野辺の楽しさを素直に表現するものであった。

では、公人としての自己に対する意識から逃れた時、王安石は彼を取り巻いている世界とどのように向かい合うのだろうか。このような問いに対する答えを求めめるための示唆を、王安石が鍾山の山中で制作したい

くつか詩に見ることが出来る。

前章で見た「書湖陰先生壁二首」其一は、鍾山から流れ出た水が人の住まいの周囲を巡って流れている様子を述べていたが、王安石は自分の住まいについても「鍾山即事」詩（臨川集卷三十・元豐六年）に、次のような同様の表現をしている。

潤水無聲繞竹流 潤水 聲無くして竹を繞りて流れ

竹西花草弄春柔 竹西の花草は春柔を弄す

茅簷相對坐終日 茅簷 相ひ對して坐すること終日ならんとし

一鳥不鳴山更幽 一鳥 鳴かずして 山は更に幽なり

ここでもやはり詩は水の描写から始まり、次にその水がめぐるように流れている竹、さらに竹の西側に生えた春の柔らかな花や草という順序で描写が続いていく。そして転句に至って、その情景を茅葺き屋根の住まいから終日眺めている作者が描かれる。これまでに挙げた詩句と同様に、この詩の描くのもまた春景であるが、ここでは春の景物が繊細でやわらかく、穏やかな落ちつきを感じさせるものとして描かれていることに注意したい。

これまでに見てきたように、王安石の詩において田園での自足は、静かで穏やかな喜びとして描かれていたのだが、さらに、田園、あるいは自己の周囲にある景物のなかでも、とりわけ繊細なものに着目して、そのデリケートな美しさを描写しようとする傾向を強く持っている。そのような傾向を端的に示す例としては、この詩に現れる「春柔」と表現される若草や、また「鍾山晚歩」（臨川集卷二十九）で「小雨輕風落棟花、細紅如雪點平沙。（小雨 輕風 棟花を落とす、細紅は雪の如く 平沙に點ず。）」と表現される、暮れ方の鍾山のふもとの、こぬか雨とやわらかな風を受けて、棟の細かな花びらが平らな砂地の上に赤い雪のように

点々と散り落ちている情景を挙げる事が出来るだろう。これらの詩に見ることのできる繊細なもの、やわらかなものに対する志向の存在を、王安石の詩には指摘することが出来るのではないだろうか。

このような繊細さに対する志向は、例えば次に示す蘇軾「新城道中二首」其一（東坡集卷四 古典研究會叢書漢籍之部 汲古書院 一九九一年）の表現と対比されるものである。

東風知我欲山行 東風は私の山行せんと欲するを知りて

吹斷簷間積雨聲 吹斷す 簷間 積雨の聲

嶺上晴雲披絮帽 嶺上の晴雲は絮帽を披り

樹頭初日挂銅鉦 樹頭の初日は銅鉦を挂く

野桃含笑竹籬短 野桃は笑みを含みて 竹籬は短く

溪柳自揺沙水清 溪柳は自ら揺れて 沙水は清し

西庵人家應最樂 西庵の人家は應に最も樂しかるべし

煮芹燒筍餉春耕 芹を煮 筍を燒きて春耕に餉せん

杭州通判期の蘇軾が制作したこの詩は、同じく春の田園での自足した気分を描きながらも、擬人法を駆使していくつもの景物を人間に引きつけることで、にぎやかで心榮しく、ある種、人間くさい世界を描き出している。蘇軾の描くこのような楽しい田園に対して、王安石の描き出す春の田園は、一面では前章で見たような豊饒さによって彼の為政者としての自負を反映しつつも、別の面では、より繊細な喜びを静かに味わうことのできる場所として感じられているのではないだろうか。このような繊細さに対する志向は、むしろ晚唐詩の詩風に近いものを感じさせるものであり、例えば杜牧「洛陽長句二首」其一（全唐詩卷五百二十一）の「草色人心相與閑、是非名利有無間。橋橫落照虹堪畫、樹鎖千門鳥自還。（草色と人心とは相ひ與に閑かにして、是非と名利とは有無の間に

あり。橋は落照に横たはり虹は畫くに堪へ、樹は千門を鎖して鳥は自ら還る。」や「初春雨中舟次和州横江裴使君見迎李趙二秀才同來因書四韻兼寄江南許渾先輩」（全唐詩卷五百二十三）の「芳草渡頭微雨時、萬株楊柳拂波垂。（芳草 渡頭 微雨の時、萬株の楊柳 波を拂ひて垂る。）」また韋莊「臺城」（全唐詩卷六百九十七）の「江雨霏霏江草齊、六朝如夢鳥空啼。（江雨は霏霏として江草は齊しく、六朝は夢の如くにして鳥は空しく啼く。）」等の描く落ち着いた繊細さに類似しているだろう。王安石の詩が「美への沈潜」という点において晩唐の詩人に得ていることについては清水氏前掲書（九頁）に指摘があるが、この点について検討することは、北宋詩における晩唐期の詩風の継承について考えるための示唆を得ることのできるものであろう。

また「遊鍾山」（臨川集卷三十）には、次のような表現を見ることが出来る。

終日看山不厭山 終日 山を見るも山を厭はず

買山終待老山間 山を買ひ 終に山間に老いるを待つ

山花落盡山長在 山花 落ち盡くして 山は長く在り

山水空流山自閑 山水 空しく流れて 山は自ら閑かなり

一日中鍾山を見ても、鍾山を厭にならない。そこで山に土地を買い、この山の中で年をとることにした。山に咲く花が散り尽くしても、山は永遠に変わらずに存在し続け、山の川の水はただただ流れてゆき、山はおのずから静かである、と詩は述べている。ここに描かれた鍾山は、作者を恐れさせようとせず、親しく接近して来ようともしない。それはただ一切の変化を超えて存在し続ける、不変の山としてとらえられているのではないだろうか。この詩の各句に二度ずつ「山」字が用いられていることは、作者がいくらか言葉遊びをしているような軽い気分を含み

ながら、この詩を作っている様子を窺わせるが、それは抑制の効いたものであって、決してふざけているようなものではないだろう。

李壁（卷四十四）は結句の後に付した注で、志閑禪師詩「閑花一任風吹落、留得青山在即休。（閑花は一に風の吹き落とすに任せ、青山に留まり得て在れば即ち休す。）」を引いているが、『景德傳燈録』卷十二南嶽下第五世・臨濟義玄法嗣の灌谿志閑禪師（唐乾寧二年没）、また『宋高僧傳』卷十唐婺州五洩山靈默傳附志閑の記事にこの詩を見ることはできない。しかし志閑の詩の「ひっそりと咲く花は風の吹き散らすに任せ、散った花びらが青山の中に留まったのなら、それはそれで結構なことだ。」という内容が、この詩の発想に取り入れられている可能性は充分にあるだろう。すでに第一章で見たように、古来、鍾山は一面で佛教的な雰囲気や濃厚に持つ場所でもあり、王安石も鍾山にあった定林寺をはじめとするいくつもの寺院に関わる詩を多く制作している。また王安石は没後にその住まいを仏寺にするよう遺言したほどに仏教に深く親しんでいたもので、この詩が仏教的な発想を取り入れているのはむしろ自然なことだろう。

王安石の詩における仏教の受容の様相については、さらに詳細に考察すべきであろうが、少なくともこの詩においての仏教的な発想の取り入れは、古来の中国古典詩が繰り返し表現してきたような、変移していく景物や生命の無常を悲しむという方向ではなく、むしろその変移のあるがままを受け入れて、移ろいゆく景物の中であるからこそ、同じく移ろいゆく存在である人間が、静かな諦観を含んだ安らぎを感じることができるといふ方向に向かっていっているのではないだろうか。そのような感覚で世界を見回した時、人間を取り巻く様々な景物は、もはや人間に恐怖を感じさせる対象ではなく、また人間に親しく接近して来ようとするもの

でもなくなるだろう。王安石が山中の定林寺に寄せた「定林所居」詩（臨川集卷三十）に見られる、「臨溪放艇杖依山坐、溪鳥山花共我閑。（溪に臨み艇を放ち山に依りて坐す、溪鳥山花我と共に閑かなり。）」という表現も、鳥と花と私とがどれもそれぞれに静かな安らぎの中にある同種の状態を描いたものと考えることができよう。鍾山の山中に在る晩年の王安石は、ここを、季節の変化と自らの人生の移ろいゆく時とを感じながら、そのあるがままを静かに受け入れることのできる場所としてとらえたのではないだろうか。

*

本稿ではここまで王安石の詩に繰り返し登場する「鍾山」という題材を取り出し、その描かれかたを追いながら、彼の詩の性格について考察してきたが、この一つの断面からも、個々の詩の背後に、様々な要素が絡み合うようにして存在している様子を窺うことができたのではないだろうか。官遊中の詩に描かれた遠方から望み見られた鍾山、引退後に江寧府から仰ぎ見られた鍾山、また山中に身を置いて感じられる鍾山のそれぞれは、その時々彼の目を通して捉えられ、詩の表現に映し出されたものであるが、しかし、それらの情景は同時に、当時の士大夫に広がっていた買田徙居の風潮や、彼自身の為政者としての自負といった社会的な背景を持ち、社会的存在としての彼を反映しているものでもあった。また、より彼の内面的な傾向に関わると思われる繊細さに対する志向は、北宋中期の詩における晩唐詩の受容を考える資料となるべきものであるが、その繊細な美的感覚と、社会的存在としての自己に対する意識や自負の強さという、相異なる要素が、一人の人物、さらには一篇の詩のなかに並存している状況を指摘することができよう。言うまでもなくその並存のあり方は個々人によって様々であり、美意識を研ぎ澄まし、専

ら詩の芸術性を追求しようとする傾向を強く持つ人物から、官僚としての自意識を強く打ち出そうとする者まで、種々の様態があり得たと思われる。そのような状況は、一面で王安石をはじめとする文人官僚たちの精神の幅広さを示すものであると同時に、別の一面では、彼らのそれが内に抱いていた不安定さを窺わせるものでもあり得るのではないだろうか。むしろそのような内面の葛藤からこそ、前代までのものとは違う、新しい宋詩の詩風が生まれてくるのだろう。

【注】

本稿ではテキストとして『臨川先生文集』（四部叢刊本）を使用し、『王荊公詩李壁注』上下（上海古籍出版社 一九九三年）を参照した。また王安石の年譜、作品の制作年代については、宋 詹大和等撰・裴汝誠點校『王安石年譜三種』（北京中華書局 年譜叢刊 一九九四年）のうち、他二種を参考としており、また最も詳細な、清・蔡上翔『王荊公年譜考略』に従った。

- (1) 「靈山紀地徳、地險資嶽靈。終南表秦觀、少室邇王城。翠鳳翔淮海、衿帶繞神垌。北阜何其峻、林薄杳葱青。」
- (2) 「君王挺逸趣、羽旆臨崇基。白雲隨玉趾、青霞雜桂旗。淹留訪五藥、顧步佇三芝。於焉仰鑣駕、歲暮以爲期。」
- (3) この詩では家族に対する思いは表現されていないが、王安石には「寄呉氏女子」詩（臨川集卷一）・「寄虔州江陰二妹」（同卷十三）・「將母」詩（同卷二十一）等、離れて暮らす家族に寄せるものが多く存在し、それらには母や他家に嫁した妹、また娘に対するやさしい心遣いが表現されており、作者の家庭人としての顔を窺うことができる。
- (4) 「揚州月」をめぐる表現は、「雜詠四首」其二「已作湖陰客、如何更遠遊。章江昨夜月、送我到揚州。」にも引き継がれている。

(5) 月と鍾山に関わる表現を繰り返し使用した例としては、他に、鍾山への帰還後に、嘗て汴京で鍾山を思っていた自分を追憶する「州橋」詩（臨川集卷三十）の「州橋蹋月想山椒、廻首哀湍未覺遙。今夜重聞舊鳴咽、却看山月話州橋。」と、そのことを後に鍾山で月を見ながら回想する「夜聞流水」詩（同卷三十一）の「千丈崩奔落石碕、秋聲散入夜雲悲。州橋月下聞流水、不忘鍾山獨宿時。」をも挙げることができる。このような表現の反復は、自らの人生の軌跡を振り返り、その各々の時の心情を確認し、それらが今に繋がっていることをかみしめるものではないだろうか。

(6) 蘇軾の買田徙居を巡る心情とその詩における表現については、拙稿「蘇軾の歸田と買田」（『中國文學報』第五十四冊 一九九七年）で考察した。